平成２４年度～令和４年度小中連携英語教育推進事業　事業のまとめ

１ 事業の目的

中学校区内の小・中学校が連携し，学習内容の系統性や指導方法の継続性等に配慮した指導計画の作成や授業づくりを通じて実践研究を行い，その成果の普及により児童生徒の英語によるコミュニケーション能力及び教員の指導力の向上を図り，本県の英語教育の充実に資する。

２ 事業の必要性（事業計画立案当時）

小学校への外国語活動の導入に伴い，小・中学校が緊密に連携し，それぞれの校種における役割を相互に認識しながら，より系統的で実効性のある指導を行うことが必要となっていた。

特に中学校外国語の指導に当たっては，小学校で英語によるコミュニケーションの「素地」を身に付けた生徒が入学してくることから，従来の指導計画を見直し，小・中の円滑な接続や系統性に配慮した指導計画及び評価計画の整備とそれに基づいた授業実践が急務となっていた。

３ 事業の期間

平成２４年度～令和４年度

４ 事業の概要（県委託事業，指定期間　各地区２年

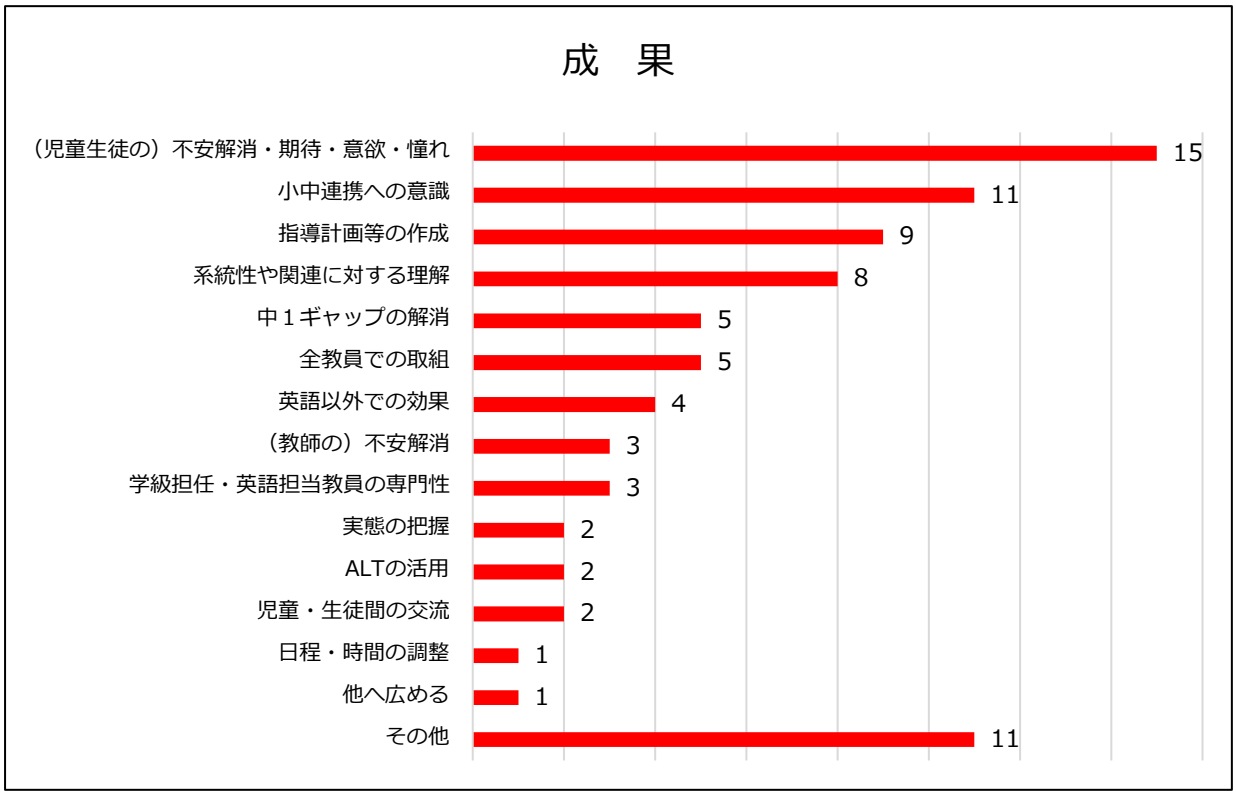
- 研究推進地区（中学校区）の指定
- 中学校区内に「小・中連携英語教育推進委員会」を設置
  ※小・中教員，市町村教育委員会担当，教育事務所指導主事等で構成
- 小・中の円滑な接続や系統性に配慮した指導計画及び評価計画の作成（中学校は Can-Do リストの活用を含む）と授業実践
- 日常的な成果共有機会の設定　※周辺校への授業公開
- 研究推進地区合同研究報告会の開催（２年次）

５ 各年度の研究推進地区

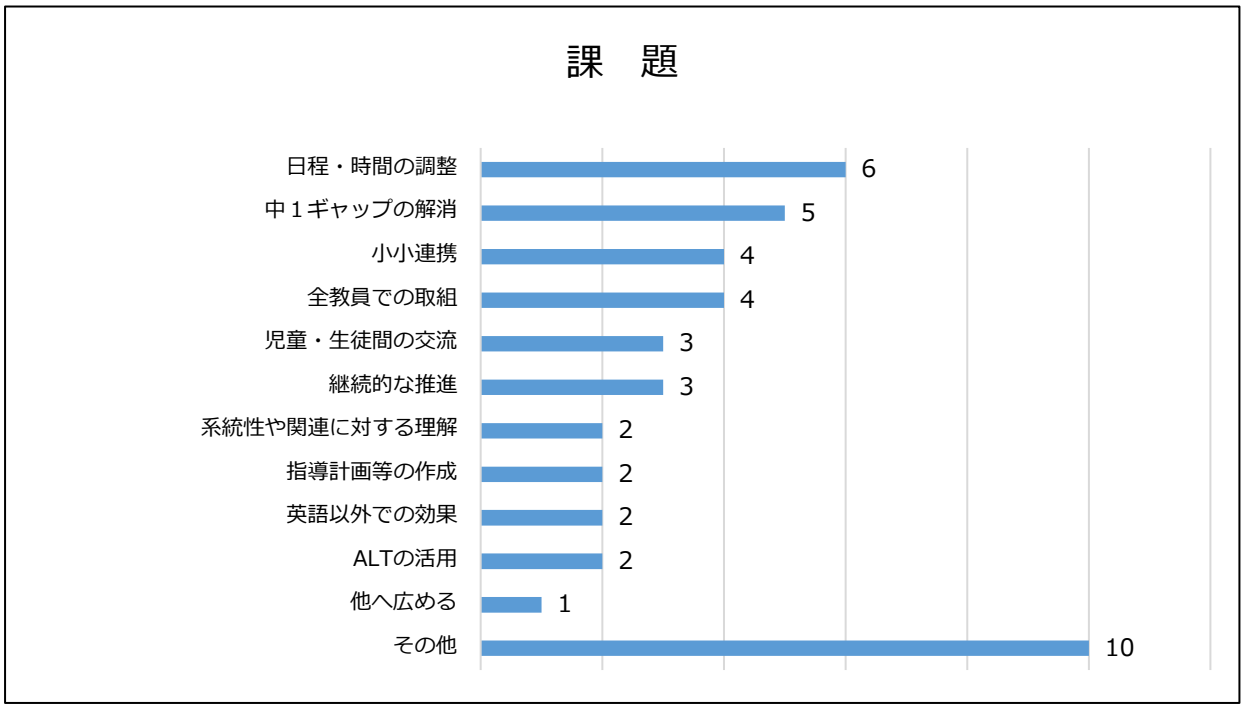
	１年次	２年次
平成２４年度	角田市（北角田中学校区） 大和町（大和中学校区・宮床中学校区） 加美町（宮崎中学校区） 登米市（石越中学校区）	
平成２５年度	南三陸町（歌津中学校区）	角田市　大和町　加美町 登米市
平成２６年度	大郷町（大郷中学校区） 石巻市（稲井中学校区）	南三陸町
平成２７年度	柴田町（船迫中学校区）	大郷町　石巻市
平成２８年度	栗原市（志波姫中学校区）	柴田町
平成２９年度	白石市（東中学校区）	栗原市
平成３０年度	大崎市（古川南中学校区）	白石市
令和元年度	松島町（松島中学校区）	大崎市
令和２年度	柴田町（槻木中学校区）	松島町
令和３年度	登米市（豊里小・中学校）	柴田町
令和４年度		登米市

６ 事業の成果と課題

本事業は，平成２４年度から令和４年度までの１１年間にわたり展開してきた。各推進地区の事業報告書から各地区の成果と課題，有効だった手立て等についての記述を抜粋したものが**【別紙１】**，別紙１の成果と課題を主な内容別に分類した結果が**【図１】【図２】**である。



【図１】成果　　**単位：件**



【図２】課題　　**単位：件**

（1）成 果

① 不安の解消，意欲の向上（児童生徒）

ほぼ全ての推進地区において，児童生徒の英語学習に対する不安の解消や意欲の向上が成果として挙げられ，小学校児童については「中学校の英語に対して**不安感ではなく期待感**を持たせることができた」といった成果が，中学校生徒については「（小学生に英語を教えることで）**今後の学習への動機付けに**なった」「英語が苦手な生徒も最後まであきらめずに英訳を行った」といった成果が報告された。また，「**英語学習に対しての目的意識**を持つようになった」といった報告があったことからも，小中連携を意識した取組が児童生徒の意欲の向上に結び付いたと言える。

② 教員の意識の向上

従来も各教科等において互いの校種の学習内容を踏まえた指導が行われてはいたが，本事業を通して，互いの外国語教育の目標の違いについて理解を深め，中学校への接続・小学校からの接続を意識しながら授業づくりに取り組むことで，**「授業づくりの意識が変わった」「授業改善の手掛かりとなった」**といったように，指導方法改善への取組につながった。

③ 小中のつながりを意識した指導計画作成，系統性への理解

小中連携を意識した年間指導計画やカリキュラム等の作成と，それに伴う小中の**学習内容の系統性や関連に対する理解**に関する成果も多く報告された。本事業に取り組むにあたり題材や言語材料の両面から既存の年間指導計画を見直し，修正を図ることで，「**互いの授業に対する理解**が深まった」「中学校で特に**重点を置くべき内容を中学校3年間の流れの中で捉えることができた**」「**学校ごとの実践につながり**を持たせることができた」といった成果が見られた。

④ 中１ギャップの解消

小・中学校それぞれの教員が互いの校舎を行き来し授業実践や授業参観に臨むことで，**小学校6年児童と中学校教員が顔なじみ**となり，**中1ギャップの解消**につながった。また，中学校入学時に**教員・生徒双方が互いに親しみの気持ち**をもって授業がスタートでき，**学校生活への生徒の順応が早くなった**という報告も見られた。

⑤ 全教員での研修

学級担任や英語科担当教員以外も含め全校体制で研究に取り組んだことで，「学習指導要領の趣旨や外国語活動の内容・指導法についてより理解が深まった」「**全職員が協働**で取り組め，**組織的な学び**ができた」といった成果につながった。

⑥ 英語学習以外への効果

「他教科でもペア・グループ活動での意見交流が活発になった」「どの教科でも生かせる対話的で深い学びにつながった」など，**英語以外の教科でも，児童生徒同士の関わり合いや話合いの場面での積極性の高まりや学びの深まり**につながったという学習面での成果が報告されるとともに，「生徒指導の面でも相互理解や共通理解が図られた」「小中連携が深まり，互いの授業づくりや生徒指導にも生かすことができる」など，**小・中学校が連携しての生徒指導**にもつながったという成果が挙げられた。

⑦　不安の軽減・解消（教員）

授業に向けての検討会や研修会を通して小学校外国語活動・外国語の教材や指導法等について協働的に学ぶことで，「指導に対する**教員の不安を少なからず解消**できた」「指導に対する**不安を感じる教員が減った**」という成果があった。また，各単元の授業後，単元指導計画に加筆修正を加えることで指導計画により具体性を持たせ，その結果「英語に**苦手意識を持つ教員でも負担感なく授業**を行うことができた」という成果も報告された。

⑧　学習内容の定着

「小中が指導内容や指導方法等について連携して取り組むことが，学習意欲や学習内容の定着につながる」など，学習内容の定着に言及する記述も見られた。

⑨　その他

上記のように様々な成果が報告されたが，何より，「英語が苦手な生徒も笑顔で英語学習に取り組めるようになった」「小学校の外国語活動について『楽しかった』，これからの中学校での英語学習について『とても楽しみだった』『楽しみだった』と答える生徒が増えた」という報告も，**英語学習の土台となる「コミュニケーションの楽しさ」を体感させることができた**という点において，大きな成果であると言える。

（2）課　題

①　日程・時間の調整

事業に係る会議や授業づくりに関する打合せ等のための**日程や時間調整の困難さ**に関する課題が多く挙げられた。小学校と中学校では時程が異なることや，放課後の部活動や生徒指導等，互いの校種の全教員が時間を合わせて会議等を行うことは難しかったと，多くの推進地区で報告があった。

②　指導内容の充実（中学校入門期）

中１ギャップの解消を成果として挙げていた推進地区があった一方で，「**中学校入門期における指導内容を吟味**する必要がある」「**（今後）ギャップの解消を意図した具体の指導計画を検討**していく」など，小学校から中学校への円滑な接続のためには更なる工夫が必要であるとする記述も見られた。

③　小小連携，児童生徒同士の交流や学び合い

「小小連携も計画的に行う必要がある」「小学校間の共通理解を更に深めていく」など，**小小連携についてはまだ改善の余地がある**とする課題も挙げられたほか，小・中学校の教員同士の連携，すなわち年間指導計画等を基にした学習内容の系統性や指導方法の連携は進んだものの，**児童と生徒の間の交流や学び合いを進めることはなかなかできなかった**という記述も見られた。

④　その他

全校を挙げて小中連携に取り組めたという地区があった一方，**英語科担当や小学校高学年担任以外の教員の意識を高めることが難しかった**という地区も見られた。

そのほか，**他教科・領域等や生徒指導への効果の波及**，２年間の実践と積み上げを継続できる組織づくりと年間指導計画の蓄積，**取組の成果を県内に広く発信する**ことなどが，今後の英語教育推進に向けて更に改善すべきことや継続していきたいこととして挙げられていた。

（3）有効な手立て等

※それぞれの手立ての具体については【別紙１】参照

課　題	課題に対して有効と考えられる手立て等
▲　中１ギャップが見られた。 ▲　中学校入門期における指導内容を吟味する必要がある。	**◎　小学校の学習内容・指導法の中学校の授業での活用** 小学校で使用した場面や教材（小学校の歌やチャンツ，アクティビティ，ピクチャーカード等），指導法を中学校の授業に組み込み，発展的に生かした。 **◎　系統性のある年間指導計画等の作成** 互いの学習内容との関連が分かるような「指導計画一覧表」「指導内容の関連一覧表」「アクティビティ一覧表」等を作成し，中学校区で共通して活用した。 **◎　交流授業** 小学校教員と中学校教員が互いの学校でティームティーチングの授業を行った。
▲　児童と生徒の間の学び合いの場を設けることがなかなかできない。	**◎　児童・生徒間の交流** ビデオレターや手紙等のプリントを使った間接的な交流を行った。
▲　英語科担当や小学校高学年担任以外の教員の意識を高めることが難しい。 ▲　小小連携がなかなか進まない。	**◎　教員研修** 英語教育推進委員やＡＬＴによる模擬授業・講話，互いの日常的な授業参観を行った。

7 まとめ

本事業の取組から，英語教育における小中連携については以下のとおり整理される。

(1)中学校区における目指す生徒の姿の共有，学びの連続性を意識した指導

小中学校の連携において重要な視点は，中学校卒業時の英語教育における目指す生徒の姿を共有することである。目指す生徒の姿を共有した上で，それぞれの段階で身に付けさせるべき力をしっかりと育成することが重要であり，その際，小学校中学年から中学３年生までの７年間の学びの連続性を意識し，小・中学校双方が連携して取り組んでいくことが望まれる。特に，外国語学習入門期における小学校の学習内容や指導法，教材等の活用などについては，小学校教員が積極的に中学校に情報の共有を図ったり，中学校教員が意識して授業に取り入れたりするなど，具体を伴った連携が必要となる。しかし情報の共有を図る機会を設定するにあたっては，いずれの年度あるいは推進地区においても小学校と中学校の時程等の違いによる日程調整の困難さが課題として挙げられていることから，管理職によるリーダーシップの下，小中連携の実現に向け組織的に取り組むなどの工夫が必要である。

（2）小中連携を意識した他教科での指導の効果

本事業の取組については，英語教育だけではなく，中学校入学後の生徒と教師間の人間関係づくりや生徒指導の面でもよい効果が得られたことが報告されている。このことから，他の教科等においても小中連携を意識して指導を工夫することで，学習内容に対してだけではなく学校生活全般に対する児童生徒の不安の解消や意欲の向上につなげることができるものと考える。

（3）県教育委員会としての今後の取組

本事業において，推進地区に限らずどの地域においても有効となり得る手立てや共通する困難さなど，様々な成果と課題が挙げられた。

県教育委員会としては，本事業で得られた知見を研修会等で広く周知するとともに，小・中学校間，小学校間で互いに「知り合う」段階（情報共有，互いの授業参観等），「交流する」段階（小・中の教員のＴＴ，児童生徒間の交流），「接続を意識する」段階（カリキュラムや教材・指導法）を意識しながら，今後も継続的に日々の指導に生かせる手立てを工夫していけるよう各市町村教育委員会に促すなど，本県の英語教育の更なる推進のために県内全域に働き掛けていく。

平成24～令和4年度 小中連携英語教育推進事業　成果と課題

【別紙１】

成　果

（児童生徒）不安解消，期待・意欲・あこがれ	○　小学校で学習した内容が中学校での学習につながることや役立つことを実感する児童生徒が増えた。
（児童生徒）不安解消，期待・意欲・あこがれ	○　児童の中学校での英語の学習に対する不安解消や期待・意欲につながった。
（児童生徒）不安解消，期待・意欲・あこがれ	○　プリントを使って間接的に児童と生徒を交流させることで（例：児童が書いた日本文を生徒が英訳するなど），英語が苦手な生徒も最後まであきらめずに英訳を行い，児童は中学生の姿に憧れを感じたりすることができた。
（児童生徒）不安解消，期待・意欲・あこがれ	○　小中が指導内容や指導方法等について連携して取り組むことが，学習意欲や学習内容の定着につながることがうかがえた。
（児童生徒）不安解消，期待・意欲・あこがれ	○　児童の英語に対する抵抗感が確実に小さくなった。
（児童生徒）不安解消，期待・意欲・あこがれ	○　交流授業やビデオレター，英語暗唱・弁論大会の発表会等を通して，児童・生徒間の交流を図ることができた。中学生に対する憧れや中学校での外国語の授業への期待感を高めることができた。
（児童生徒）不安解消，期待・意欲・あこがれ	○　小学校の外国語活動が「楽しかった」と答える生徒や，入学前に中学校で英語を学ぶことが「とても楽しみだった」「楽しみだった」と答える生徒が増えた。
（児童生徒）不安解消，期待・意欲・あこがれ	○　中学校の英語に対して不安感ではなく期待感をもたせることができた。
（児童生徒）不安解消，期待・意欲・あこがれ	○　英語や発表を苦手としている生徒も笑顔で英語学習に取り組めるようになった。
（児童生徒）不安解消，期待・意欲・あこがれ	○　一人一人が意欲的に発表しようとする姿が多く見られるようになった。
（児童生徒）不安解消，期待・意欲・あこがれ	○　学習意欲を高めることができ，楽しくコミュニケーションを取っている児童が増えた。
（児童生徒）不安解消，期待・意欲・あこがれ	○　児童が，身に付けた英語を使ってみたい，使えた実感を味わいたいという英語学習に対しての目的意識を持つようになっている。
（児童生徒）不安解消，期待・意欲・あこがれ	○　中学校英語への期待や憧れをより高めることができた。
（児童生徒）不安解消，期待・意欲・あこがれ	○　中学校においては，小学生に英語を教えることでこれまでの自分の学びを振り返るきっかけとなり，今後の学習への動機付けになった。
（児童生徒）不安解消，期待・意欲・あこがれ	○　中１の書いた学校紹介の英作文を小学生の体験授業の際に用いることで，生徒の意欲を高められた。また，小学生の中学校での英語学習に対する意欲も高められた。

小中連携への意識	○　小中連携に対する教員の意識を高めることができた。
小中連携への意識	○　中学校教員が，小中連携の在り方を考えるきっかけとなった。
小中連携への意識	○　小・中の英語教育の目標の相違や小中連携の重要性を改めて認識する機会となった。
小中連携への意識	○　小中の目標の違いを意識し，カリキュラムの見直しを図った。
小中連携への意識（授業）	○　指導案の中に単元の系統票を位置付け，小中連携を更に意識しながら授業を進めることができた。
小中連携への意識（授業）	○　小学校での活動で学習したことを想起させるような導入を行うなど，中学校一年生の指導の仕方や授業づくりの意識が変わった。
小中連携への意識（授業）	○　中学校では，小学校の外国語活動の内容を理解した上で，中学校の授業実践の工夫を図ることができた。
小中連携への意識（授業）	○　カリキュラムの修正を行い，系統的な指導を図ることで，中学校への接続を意識した授業づくりに学校全体で取り組むことができた。
小中連携への意識（授業）	○　小・中の学習のつながりを意識したカリキュラムの作成と，それに伴う指導方法の改善を図ることができた。
小中連携への意識（授業）	○　感染症対策のために交流や授業参観を行うことはできなかったが，３校で単元をしぼって実践することで，系統性を意識しながら授業づくりを行うことができた。
小中連携への意識（授業）	○　小学校の教材や活動を実際に扱うことで，中学校英語科の授業改善の手掛かりとなった。
指導計画等の作成	○　小・中学校の指導計画を作成した。小小連携や小中の学習内容の系統性を意識した指導を行うことができた。
指導計画等の作成	○　小中連携を踏まえた指導計画の作成に向けた意識の統一を図ることができた。
指導計画等の作成	○　中学校において，１学年の年間指導計画を見直した。小学校の指導内容を知るだけではなく，中学校で特に重点を置くべき内容を中学校３年間の流れの中で捉えることができた。
指導計画等の作成	○　系統表を作成したことで，学校ごとの実践につながりを持たせることができた。
指導計画等の作成	○　授業づくりや年間指導計画の改善を進めることができた。
指導計画等の作成	○　小中の系統性を意識した年間カリキュラムの作成に取り組み，活用することができた。
指導計画等の作成	○　小中連携を踏まえた指導計画を作成することができた。
指導計画等の作成	○　小・中の学習のつながりを意識したカリキュラムの作成ができた。

指導計画等の作成	○　小・中のカリキュラムの系統性が見えてきた。
系統性や関連に対する理解	○　小学校段階での共通指導事項や中学校との関連を捉えやすくなった。
系統性や関連に対する理解	○　小学校外国語と中学校英語との関連が分かりやすくなった。
系統性や関連に対する理解	○　小・中それぞれにおいて，互いの授業に対する理解が深まった。
系統性や関連に対する理解	○　小・中互いの授業を参観したことで，それぞれの授業づくりの意図や児童生徒の実態の理解を図ることができた。
系統性や関連に対する理解	○　小・中それぞれが抱えている悩みや課題，目指す姿について共有することができた。
系統性や関連に対する理解	○　児童生徒の学習状況やそれぞれの校種の授業づくりについて適切な理解と共有を図ることができた。
系統性や関連に対する理解	○　小・中が互いの内容について学ぶことで，小学校は中学校卒業時の目指す姿をイメージすることができ，中学校は中学校入門期における指導計画作成や実践に役立てるなどできた。
系統性や関連に対する理解	○　中学校が児童にどんな力を小学校卒業までに身につけさせてほしいのかを具体的に知ることができた。
中1ギャップの解消	○　中学校入学後の英語の授業に小学校とのギャップを強く感じさせない機会を多く設けることができた。
中1ギャップの解消	○　英語の授業だけでなく中１ギャップの解消にもつながった。
中1ギャップの解消	○　中学一年生は，小・中のギャップを感じることなく，学習への意欲も持続できている。
中1ギャップの解消	○　英語に限らず話をしたことがある教員等がいることで，児童の中学校生活への順応が早くなった。
中1ギャップの解消	○　中学校入学時点で，教員・生徒双方が親しみの気持ちをもって授業をスタートできるようになった。
全教員での取組	○　全学年の教員が外国語活動への理解を深めることができた。
全教員での取組	○　学級担任ではない教員も含め全員が外国語活動の授業研究を行うことで，学習指導要領の趣旨や外国語活動の内容・指導法についてより理解を深めることができた。
全教員での取組	○　外国語活動の授業づくりについて全教員で取り組むことができた。
全教員での取組	○　全校体制で外国語活動の授業づくりに取り組むことができた。
全教員での取組	○　全職員「協働」で取り組め，組織的な学びができた。
（教師）不安解消	○　指導に対する教員の不安を少なからず解消できた。
（教師）不安解消	○　指導に対する不安を感じていた教員が減った。

（教師）不安解消	○　各単元の授業後，指導計画により具体性をもたせるため単元指導計画に積極的に書き込みをした結果，英語に苦手意識を持つ教員でも負担感なく授業を行うことができた。
学級担任・英語教師の専門性	○　中学校の英語科担当の専門性が小学校の実践に役立つ点が多かった。
学級担任・英語教師の専門性	○　児童の実態を把握している小学校の学級担任，英語教育の専門性を持つ中学校英語科教員それぞれの立場からの授業づくりができた。
学級担任・英語教師の専門性	○　小学校においては，中学校英語担当者からのアドバイスにより具体的な指導の在り方を考えることができ，指導改善に生かすことができた。
実態の把握	○　児童や生徒の実態が分かり，より実態に即した授業を組み立てることに役立った。
実態の把握	○　担任が主となって授業を進められるようになってきた。学級の児童の実態を考慮した活動を行うことができた。
英語以外での効果	○　他の教科や生徒指導の面でも相互理解や共通理解が図られた。
英語以外での効果	○　他教科での集団の関わり（ペアやグループ）での意見交流が活発になった。
英語以外での効果	○　どの教科でも生かせる対話的で深い学びにつながった。
英語以外での効果	○　小中連携が深まり，互いの授業づくりや生徒指導に生かせることを確認できた。
ALTの活用	○　小・中に同じALTが配属されることで，小・中の架け橋となり，互いの情報を共有することができた。
ALTの活用	○　小・中どちらも指導しているALTを通して互いの情報を共有することができ，授業づくりの一助となった。
児童・生徒間の交流	○　児童生徒が互いに教え合って学ぶ姿が見られるようになった。
児童・生徒間の交流	○　直接の交流ができなくても，英作文をウェブサイトに載せたり小学校の外国語科の授業で使ったりと，英作文を介して交流を図ることができた。
日程・時間調整	○　両校の行事や研究の進捗に合わせ，柔軟に日程調整しながら，順調に研究・研修を行うことができた。
他へ広める	○　校内はもとより周辺校へ研究の成果を広めることができた。
その他	○　中学校では，小学生の英語学習者としての素地を指導者が理解した上で指導することの重要性を改めて実感することができた。
その他	○　意見交換・質疑・協議の機会を確保することで，授業を見る観点・授業提案する視点が明確になり，回を重ねるごとに授業の質が向上した。
その他	○　中学校では，小学校で慣れたクラスルームイングリッシュへの反応はとてもよく，挨拶や会話をつなぐ言葉についても抵抗感なく楽しみながら使用する姿が見られた。
その他	○　小学校での中学校教員のT2としての在り方について，小・中両方に無理がなく，必要な準備もして行える授業について検討・確認することができた。
その他	○　共同研究の仲間として互いに硬くならずに行き来できる土台が作れた。
その他	○　英語そのものの楽しさを味わわせるための活動を工夫し，授業実践を通して共有することができた。

その他	○　小学校においては，同級生や教師以外と関わる場面を設定することで，コミュニケーションにおける大切さ，楽しさを体感させることができた。
その他	○　導入に町のことや身近な話題を取り上げることで，児童の内容理解の助けになった。
その他	○　町で作成している写真教材を活用した。町内共通のものなので，３校全てで活用することができる。次年度も継続して活用していきたい。
その他	○　町のことを詳しく知るのに「柴田100選」は非常に有効であった。
その他	○　外国語・英語が身近になった。

課　題

日程・時間調整	・　より効果的な教員交流や児童・生徒間の交流を進めていくためには，事前の打合せが重要になるので，打合せのための時間調整等を工夫する必要がある。
日程・時間調整	・　中学校区三校での授業検討会や会議のための日程調整が難しく，思うように合同会議が実施できなかった。
日程・時間調整	・　授業参観や交流のための時程や日程調整に時間を要した。
日程・時間調整	・　小中連携を図るための日程の調整が難しかった。
日程・時間調整	・　授業づくりに係る事前の打合せの負担が大きかった。
日程・時間調整	・　小・中の日程や時間の調整が難しく，合同での事後検討会の回数が少なかった。
中1ギャップの解消	・　小・中の学習のギャップをどうするか。
中1ギャップの解消	・　小中の接続期の指導について，ギャップの解消を意図した具体の指導計画を検討していく。
中1ギャップの解消	・　中学校段階での音声から文字への学習に円滑に接続できるようにしていく必要がある。
中1ギャップの解消	・　小学校で音声中心で学んだことが，中学校段階での音声から文字への学習に円滑に接続できるようにしていく必要がある。
中1ギャップの解消	・　小学校との系統性や継続性を考えながら，各事の導入も含めた中学校入門期における指導内容を吟味する必要がある。
小小連携	・　小小連携を生かした外国語活動の進め方に課題が残る。
小小連携	・　小中連携だけでなく小小連携も計画的に行う必要がある。
小小連携　小中連携	・　小学校と中学校間，小学校間の共通理解を更に深めていくために，情報交換の場を設ける必要がある。

児童・生徒間の交流	・　児童生徒同士の直接の交流は難しいこともあるため，英語暗唱・弁論大会や英語劇のビデオ撮影など，できる範囲での交流を続けていきたい。
児童・生徒間の交流	・　小中の教員間では連携できたが，児童・生徒間の交流までは実施できなかった。
児童・生徒間の交流	・　教員間の連携を図ることはできたが，児童・生徒間の交流を図るところまでは高められなかった。
全教員での取組	・　全職員の指導力を向上させるために，全学年担任の研修を深めていく必要がある。
全教員での取組	・　英語科担当や小学校高学年担任だけでなく，全職員が小中連携の目的を共通理解し，小中連携に取り組める校内体制づくりが大切である。
全教員での取組	・　外国語専科がいる小学校では，多くの教員の意識を高めることが難しかった。
全教員での取組	・　他教科の教員の成長の場が少なかった。
継続的な推進	・　小中連携を継続的に推進していくための組織づくり・研修構想が必要である。
継続的な推進	・　指定校研究で実践し積み上げてきたことを次年度以降も継続できるような組織と年間計画を作成し，小中の共有の財産としていく。
継続的な推進	・　本研究の取組が今後も継続できるように一般化を図っていきたい。
系統性や関連に対する理解	・　他の教科・領域においても小中の連携，連続性のある学びについて，両校教員が連携して取り組んでいきたい。
系統性や関連に対する理解	・　中学校作成のCan-Doリストを活用し，目指す児童・生徒像を系統的・具体的に捉え，全教員で共有を図っていきたい。
指導計画等	・　小中接続を円滑に進めるために，年間指導計画を累積していく必要がある。
指導計画等	・　中学校の年間指導計画に重点を置いて作成をしたが，今後は小学校の年間指導計画にも中学校との連携を組み込んでいくことが必要である。
英語以外での効果	・　小中連携の在り方について，英語以外の教科等への波及効果を検証し，推進していきたい。
英語以外での効果	・　他教科・領域，生徒指導でも小中接続と連携を見通し，一貫性のある指導を行えるように取り組んでいく。
ALTの活用	・　小中共通のALTの活用方法について工夫改善を行う。
ALTの活用	・　JTEやALTをT2としてより効果的に活用するためのより効率的な打合せの仕方について協議・相談を行っていく。
他へ広める	・　本地区の取組を県内に広く発信できるよう，更に研究を重ねていきたい。
（児童生徒）不安感	・　中学校の英語学習に対して「難しそうだ」と感じる児童も少なくない。児童の不安感を取り除けるような連携や指導の在り方を探っていきたい。
その他	・　学習したことを学校の外でも使うことができると，更に達成感・満足感を持たせることにつながると考えられる。「発信する」という活動の手立ても探っていきたい。

その他	・　中学校では，目に見える形で成果を上げるために，県学力・学習状況調査や標準テストでの数値目標を３年以内に設定し，中学校での学習指導の発展・深化を進める。
その他	・　小中連携を図るための，授業を中心とした実践的な取組が少なかった。
その他	・　中学生が小学校へ移動する負担が大きかった。ICTを活用した交流も視野に入れながら，バランスよく交流を図っていきたい。
その他	・　教師の見取りでは十分に課題を達成している児童であっても達成感が低い。肯定感を高める声掛けを徹底したり，達成規準を明確に示したりしていきたい。
その他	・　SAKURA PROJECTに学校一帯で取り組めるようにとALTの活用を図ってきたが，低学年が参加できる活動は少ない。
その他	・　情報を発信できない生徒は，英語の力だけではなく，情報（地図や路線図の見方等）を正しく把握していないために表現や発表ができないことが多かった。他教科での学力を高めることも必要であると分かった。
その他	・　児童生徒自身が学習の系統性をつかんだり振り返ったりできるような手立てがあるとよい。
その他	・　中１ギャップ軽減のためにも，小学校教員が中学校教員から指導のテクニックを学ぶ機会を設けられればよかった。
その他	・　教室掲示や学習のルールを共有できると更によかった。

有効だった手立て等			効　果
（中）小学校の学習内容・指導法を取り入れること	★	小学校で学習したことを中学校英語の授業に取り入れた。	→ 小学校で聞いたこと，学んだことを想起させることができ，特に中学１年生の指導に効果的だった。
（中）小学校の学習内容・指導法を取り入れること	★	中学校の授業で，小学校で使用した教材（ピクチャーカード等）を用いた。	→ 絵を使用した単語指導は中学校でも抵抗なくできる。
（中）小学校の学習内容・指導法を取り入れること	★	小学校で体験した言語活動を，中学校の授業で発展的に生かす。	
（中）小学校の学習内容・指導法を取り入れること	★	中学校の各単元の導入で，小学校で使用した教材等を活用する。	
（中）小学校の学習内容・指導法を取り入れること	★	中学校の授業の導入やコミュニケーション活動において，小学校で取り入れていた場面や活動を取り入れた。	→ 小学校での導入とよく似ていて違和感がなくよかった。小学校での学習の空気感の中で活動が進められた。生徒にとって違和感も抵抗もなかったように感じられた。
（中）小学校の学習内容・指導法を取り入れること	★	小学校で用いた教材やゲームを活用した。	
（中）小学校の学習内容・指導法を取り入れること	★	中学校の授業に，小学校での学習（語彙・表現・内容・方法）を組み込んだ。	→ 生徒が慣れ親しんでいる学習スタイルを生かして，音声による復習や導入，ドリルをごく短時間で効果的に行うことができた。それにより，より高度で内容の豊かなアクティビティを行うことができた。
（中）小学校の学習内容・指導法を取り入れること	★	小学校の歌やチャンツ，アクティビティ，ピクチャーカード等を，実態に応じて中学校でも活用する。	
系統性のある年間指導計画等の作成	★	小・中９年間の学習内容が見通せるように「指導計画一覧表」「指導内容の関連一覧表」「アクティビティ一覧表」を作成した。	
系統性のある年間指導計画等の作成	★	基本表現を繰り返し聞いたり話したりする活動（チャンツやゲーム等）を，指導計画の中に位置付けた。	→ メインのコミュニケーション活動で効果的に指導することができた。
系統性のある年間指導計画等の作成	★	小学校の教材を中学校の年間指導計画に位置付けて活用した。	→ 小・中互いの学習内容の関連が分かりやすくなった。
系統性のある年間指導計画等の作成	★	指導案の中に「小中連携に関わる単元の系統表」を位置付けた。	→ 同じ言語材料の授業が小・中で行われているので，その後のカリキュラムづくりに役立った。

系統性のある年間指導計画等の作成	★ 「小・中の系統性を意識した年間カリキュラム」は「分かりやすい」「活用しやすい」「小・中の系統性が理解しやすい」などを基本とした，誰もが活用しやすいシンプルかつコンパクトなものにする。	→	中学生に対する憧れ，英語学習に対する意欲につながった。
系統性のある年間指導計画等の作成	★ 年間指導計画に，使用した教材・チャンツや歌，児童の反応などを記載する欄を設け，記録を累積し，中学校へ確実に引き継ぐ。		
系統性のある年間指導計画等の作成	★ 中学校１年のカリキュラムを小中連携の視点から見直した。小学校での学習内容を可能な限り生かした。特に４，５月の内容について修正した。	→	４月の「自己紹介」は，これまでの名前，好きなもの程度の内容ではなく，小学校の What do you want to be?の学習内容を生かして，小中の学びにつながりを持たせることができた。
系統性のある年間指導計画等の作成	★ 「町紹介」「道案内」などの題材を小中連携の視点から洗い出し，系統表を作成した。		
系統性のある年間指導計画等の作成	★ 小学校は中学校との，中学校は小学校との学習内容の関連が分かるような年間指導計画表を作成した。	→	小学校段階での共通指導自校や中学校との関連が分かりやすくなった。
児童・生徒間の交流	★ 手紙等，プリントを使って間接的に交流した。（小学生が日本語で１日の生活について書いたものを，生徒が英訳して返す）	→	英語が留学生と自分たちを仲介する言葉として大切であることを理解させることができた。苦手な生徒もあきらめずに最後まで真剣に英訳に取り組んだ。児童は中学生の姿にあこがれを感じることができた。
児童・生徒間の交流	★ 夏休みに学区内の３小学校の６年生を中学校へ登校させる「夏の学校」を実施した。（①中１が小６に自己紹介を行い，聞き取った内容についてのＱ＆Ａゲーム　②ネームカードづくり　③自己紹介ゲーム）		
児童・生徒間の交流	★ 「中学生の英語暗唱・弁論を聴こう」（小学校が会場）		
児童・生徒間の交流	★ ビデオレター「中学生の１日の生活を紹介しよう」		
児童・生徒間の交流	★ ビデオレター「中学生の英語劇を鑑賞しよう」		
児童・生徒間の交流	★ 小学校６年生と中学校３年生が一つの課題に一緒に取り組む交流授業を行った。		
研修	★ 英語教育推進委員やALTによる模擬授業・講話		

研修	★	授業公開を３クールに分けて実施し，第１クールと第２クール，第２クールと第３クールの間にそれぞれ教職員対象の研修会を実施した。	→ 授業研究の積み上げに効果があった。
研修	★	中学校教員が小学校の授業を参観し，事後検討会にも参加した。	→ 小学校のデジタル教材の使い方，ゲームの仕方などについての研修になった。小学校の実態を理解するよい機会になった。
研修	★	小学校教員と中学校教員がチームになり，１５分程度の小学校の指導案を考え，模擬授業を行う研修を行った。	→ 楽しみながら授業をつくる様子が見られた。中学校教員から経験に基づくアドバイスを受け，授業力向上を目指した研修会となった。
研修	★	講師を招き，児童の目線でアクティビティを体験する研修を行った。	→ 言語材料の提示，チャンツの効果的な使い方，活動のモデルの提示，自己評価・相互評価の在り方などについて学ぶことができた。
研修	★	日常的な相互授業参観や意見交流の実施をした。意見や感想を感想カードで伝え合った。	
TT	★	母国語が英語でない留学生をTTで活用した。	→ 英語が留学生と自分たちを仲介する言葉として大切であることを理解させることができた。
TT	★	中学校教員が小学校の授業にT2として参加した（９月，11月，３月）。	→ 小・中の学習のつながりを感じさせる。中学校の英語学習への意欲を高める。
TT	★	小学校において，HRT，JTE，中学校教員の３人でTT指導を行った。それぞれの特性（児童との人間関係，学級づくり，英語力・正しい発音，評価の上での立場等）を生かした。	→ JRTが自分の英語力に不安や負担を感じることなく，コミュニケーションを楽しむ児童の育成を目指す授業を提案することができた。
TT	★	小学校６年生を対象とし，中学校入学を意識する３学期に，中学校教員をゲストティーチャーとして合同授業を実施する。	
振り返り	★	本時の評価規準に基づいた自己評価項目を設定した。	→ ねらいに沿った振り返りをさせることができ，次の授業に向けためあてを持たせることができた。
振り返り	★	振り返りカードは，単元を通して１枚にまとまっているものにした。	→ 児童の変容が分かりやすく，次の授業に生かすことができた。
振り返り	★	振り返りカードに，授業のねらいに沿って自由記述をさせる欄を設けた。	→ 授業の中では気づけなかった児童の思いや考えが分かり，次の授業に生かすことができた。

交流授業	★　教員交流授業（中１）。中学校教員がT1，小学校教員がT3で授業を行う：名前と地名の書き方（ローマ字の復習とヘボン式の導入）	
交流授業	★　教員交流授業（小６）。小学校教員がT1，中学校教員がT2となり授業を行う：When is your birthday?	
その他	★　小学校での“What time do you get up?”の単元のために中学生の手本をALTが撮影し，ビデオを制作した。	
その他	★　小学校３校で共通の振り返りカードを活用した。	
その他	★　相互評価（相手の発表を聞きながら，感想や気付いたことを書く）を行わせた。	→　内容を理解しながら相手のことを知ろうと集中して取り組む姿が見られた。
その他	★　他の小・中学校でも無理なく行える授業実践集，資料，指導計画を作成し，広く発信していく。	
その他	★　音声からつづりをつなぐ練習として，毎時間，ディクテーションを取り入れる。そこからテーマ作文につなげ，「書くこと」の表現力の向上を図る。	
その他	★　中学校教員の意見を取り入れながら，クラスルームイングリッシュのリストを作成する。	
その他	★　児童を対象に，夏休みを利用してALTを講師に英会話教室を行った（体験的英語学習会）。	→　ALTの研修の場にもなった。